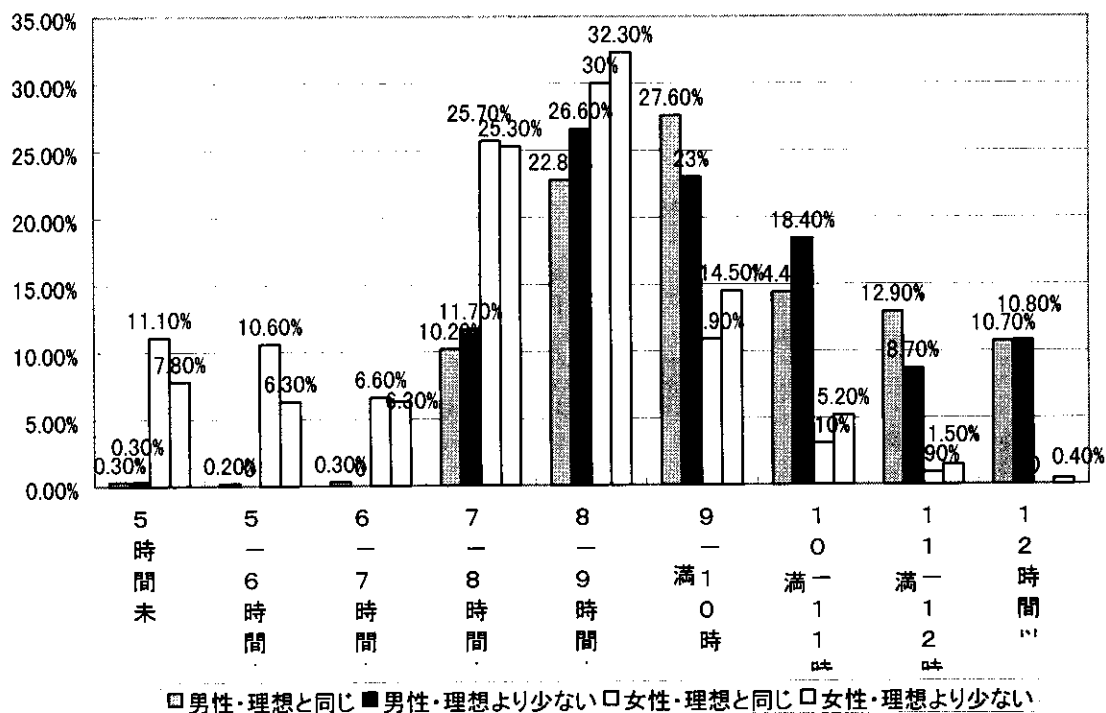
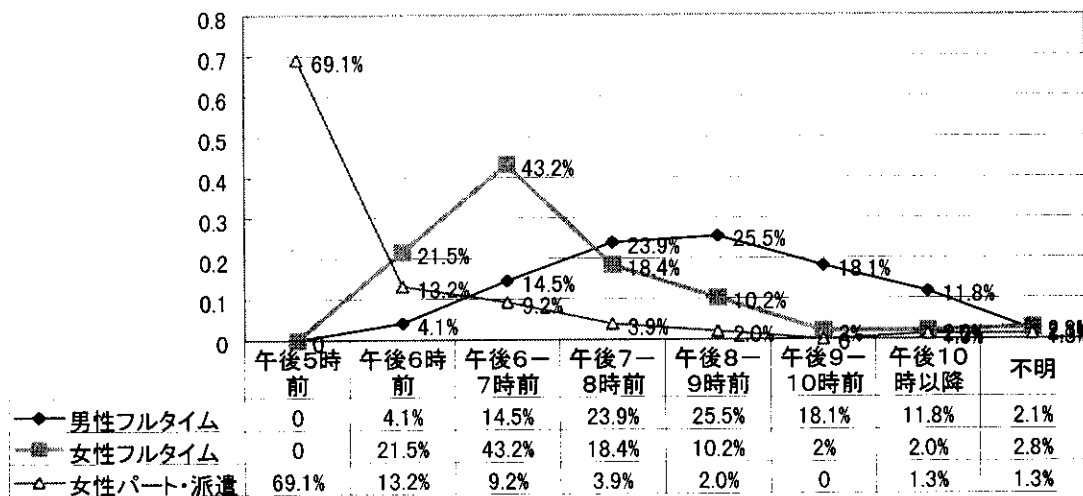


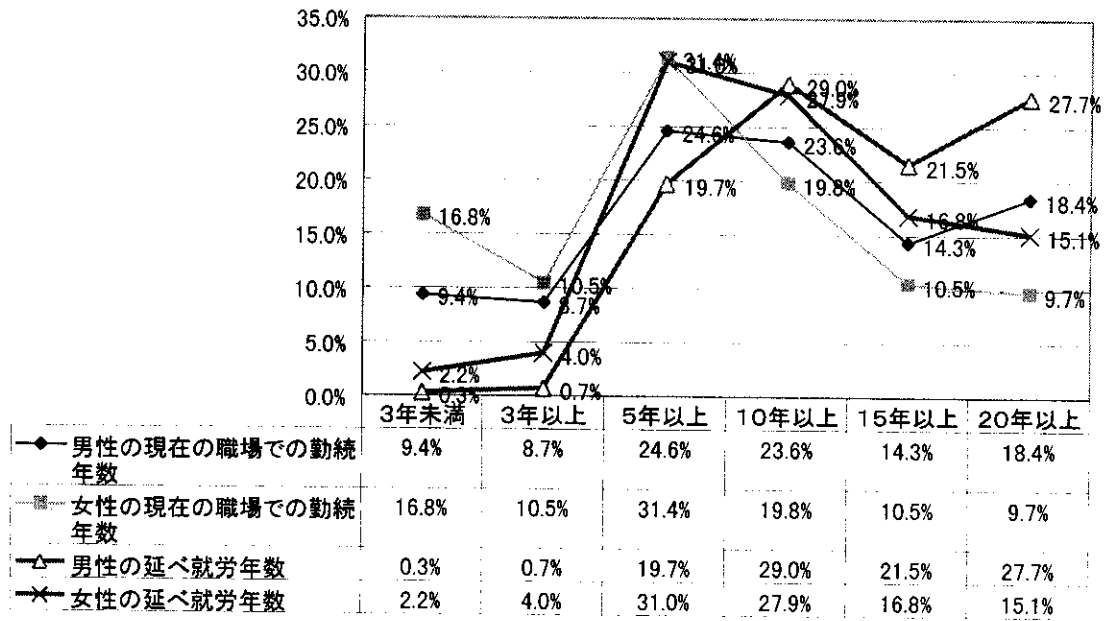
図表 14. 平日の勤務時間



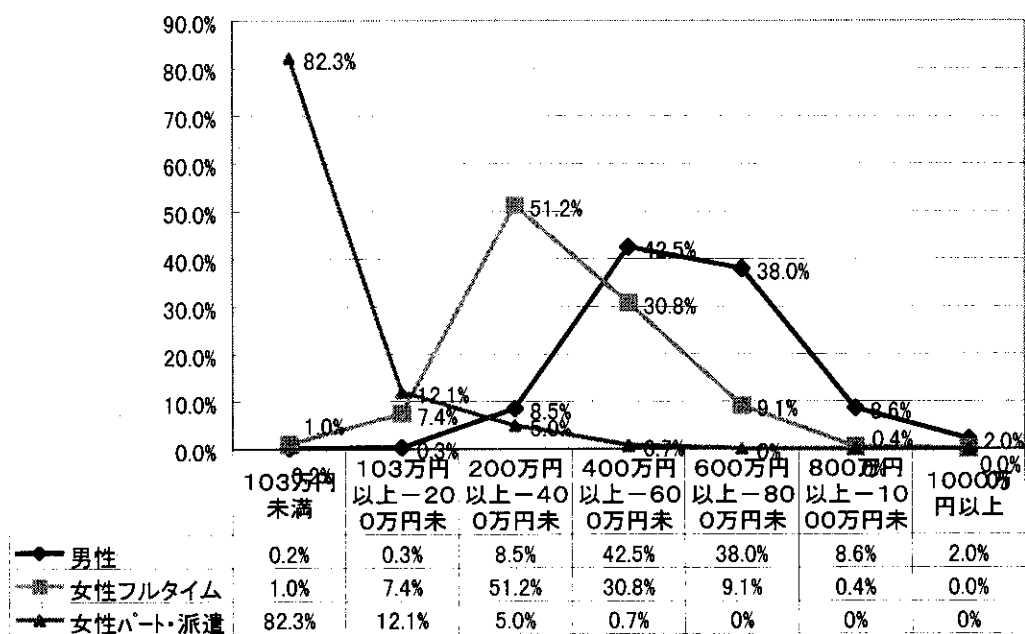
図表 15. 平日の平均帰宅時間



図表 16. 勤続年数と延べ就労年数



図表 17. 年収の分布



Ⅲ-2. 男女の役割分担について

まず最初の3つの質問では、男女の役割分担についての回答者の考え方や伝統観を聞いている。

Q1では、「女性は家庭や仕事、趣味などを選択しながら人生を送る事ができるから得だ」という項目と「女性は家事や育児の責任を負わされるから損だ」という2つの質問に対して、「そう思う」から「そう思わない」まで4段階を選択してもらった。下の図表1では全体の状況をわかりやすく把握するために、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を足しあわせた数字を載せている。つまりこの数字は、それぞれの選択肢を支持している人の割合を示している。

これをみると、男女いずれにしてもA

の選択肢よりBの選択肢、つまり、「女性は損だ」思っている人の方が多い事が分かる。また男性だけで見た場合、「女性は得だ」と思っているのは、専業主婦を持つ夫では33.3%、共働きの夫の方が30.2%であり、「女性は損だ」と思っているのは専業主婦を持つ夫では39.2%、共働きの夫の方が47.5%がそう思っている。つまり、共働きの夫の方が「女性は損だ」と思っているわけだが、それには、外で働いていてもなおかつ、家事や育児をしなくてはならない共働きの妻の実態が反映されているのかもしれない。実際、共働きでも殆どの家事を妻が担うということが、NHKの生活時間調査などでもでている。

図表1 女性は得か損か

	男性計	女性計	共働きの夫	専業主婦を持つ夫	共働きの妻	専業主婦
A女性は家庭や仕事、趣味などを選択しながら人生を送る事ができるから得だ	31.6%	41.6%	30.2%	33.3%	41.1%	42.6%
B女性は家事や育児の責任を負わされるから損だ	45.0%	53.4%	47.5%	39.2%	56.4%	46.8%
サンプル数	1071	1074	562	370	571	359

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計

また男女別に見ると、いずれにしても男性よりも女性の方が、「女性は得だ」という考え方も「女性は損だ」という考え方を支持していることが分かる。

だが、女性の間で共働きの妻か専業主婦かでも差がでていいる。「女性は得だ」は共働きの妻で41.1%に専業主婦では42.6%、「女性は損だ」では同じ順に56.4%に46.8%となっている。ここでも、共働きの妻の方が「女性は損だ」と考えている傾向が強い事が分かる。

次にQ2では、「妻の来客を夫がもてなす」「夫が食事の支度をさする」など、従来

から考えられてきた性別分業とは逆の項目を挙げ、これに対して「非常に抵抗を感じる」から「全く抵抗を感じない」まで4段階で質問した。この結果は図表2にまとめたが、これも「非常に抵抗を感じる」「少し抵抗を感じる」の比率を足した割合を挙げている。これを見ると、男女いずれにしても抵抗が強いのは「妻が外に出て働き夫が家事をする」といったこれまでの「男は仕事・女は家庭」という関係が逆転したもので、男女ともに7割以上がこれには抵抗を感じている。

図表2 男女の役割分担について

抵抗を感じる人の割合(非常に抵抗を感じる・抵抗を感じる人の割合を合計)

	男性計	女性計	共働きの夫	専業主婦を持つ夫	共働きの妻	専業主婦
妻の来客を夫がもてなす	33.6%	31.7%	33.1%	33.0%	29.2%	34.9%
夫が食事の支度をさする	38.7%	30.2%	40.0%	39.5%	27.5%	34.9%
夫が洗濯をする	35.6%	37.4%	34.0%	38.4%	35.0%	43.2%
妻が外に出て働き夫が家事をする	76.5%	75.8%	77.5%	77.6%	75.1%	78.1%
男性が育児休業を取得する	67.6%	48.8%	68.2%	67.0%	50.6%	46.1%
女性の上司のもとで仕事をする	40.1%	18.2%	42.7%	37.3%	16.8%	20.3%
男の子に食事の支度をさせる	27.9%	19.5%	29.4%	25.4%	18.2%	21.9%
サンプル数	1071	1074	562	370	571	359

次に抵抗感があるのは「男性が育児休業を取得する」の項目であるが、これには男性計の67.6%が抵抗感を示しているが、女性計は48.8%と男女差が大きく出ている。また「女性の上司のもとで仕事をする」ということに関しても男性40.1%、女性はそれが18.2%と男女間の抵抗感の違いが大きい。全般的に行って、この男女の役割分担についての意識差は、男女の差が大きく、共働きかそうでないかの差は比較的小さなものになっている。

例えば、男性で共働きかそうでないかで意識の差を比べると、共働きの方が抵抗感が小さいと予想されるにも関わらず、男性では共働きかそうでないかの意識差はとても小さい。むしろ、「女性の上司のもとで仕事をする」ことでは共働き男性の方が抵抗感が大きいのが目を引く。一方、女性の場合は、共働きの妻の方が専業主婦に比べて抵抗感が小さいと予想されるが、殆どの場合そうになっている。特に「妻の来客を夫がもてなす」「夫が食事の支度をする」「夫が洗濯をする」といった、男性が家事をする事に関しては、共働き女性の抵抗感が小さい。

さらにQ3を見てみよう。ここでは「女性は子どもができてもしっかり働けるのがよ

い」といった女性の就労に関する項目や「家計を存続させるため、妻は子どもを産むべきだ」といった伝統的な考え方についてどう思うかを聞いている。これは図表3にまとめてあるが、5つの項目のうち男女間の差が大きいものと、共働きかそうでないかが大きく差を示している項目があり、「女性は子どもができてもしっかり働けるのがよい」といった女性の就労に関する項目は、共働きかそうでないかの差が大きく出ている項目である。この項目に関して「そう思う」という人の割合は、男性計で29.7%、女性計で32%であり、それほどの男女差は見られないが、共働きかどうかの別で見ると大きな差がある。「共働きの夫」や「共働きの妻」では、「そう思う」という人の割合がそれぞれ39.7%に41.3%であるが、「専業主婦を持つ夫」や「専業主婦」ではそれぞれ17%の17.7%になる。この結果は「女性は子どもができてもしっかり働けるのがよい」と思っている人が共働きを続け、そうでない人は専業主婦のいる片働き家庭になっているのだから当たり前である、とも言える。だが、女性の就労に関しては、共働きかそうでないかでこれだけ大きな差が出るのは興味深い。

これ以外の4項目については、男女差

が大きく、男性の方が保守的な考え方を支持している事が示されている。例えば、「家系存続のため妻は子どもをうむべきである」が男性では52.3%、女性で

は35.7%の支持であり、「妻は夫の家の家風になじむべきだ」が男性で29.6%、女性16.7%などである。

**図表3 女性の就業や家のあり方について
そう思うという人の割合(「そう思う」、「どちらかというと思う」の割合の計)**

	男性計	女性計	共働きの夫	専業主婦を持つ夫	共働きの妻	専業主婦
女性は子どもができて働き続けるのがよい	29.7%	32.0%	39.7%	17.0%	41.4%	17.7%
家系存続のため妻は子どもを産むべきである	52.3%	35.7%	52.7%	51.4%	37.5%	31.8%
老後は子や孫と暮らすのが望ましい	45.6%	25.3%	47.2%	45.7%	26.6%	23.2%
妻は夫の家の家風になじむべきだ	29.6%	16.7%	29.5%	26.5%	16.6%	16.9%
夫婦は希望すれば別姓を名乗れるのが望ましい	17.7%	27.2%	15.1%	22.2%	29.2%	23.7%

Ⅲ-2.子育てについて

次のQ4からQ9までは、子どもの意味や理想・予定の子ども数について聞いている。Q4では、あなたにとって「子ども」とは何かということをつねた。解答者はいくつでも選択してもよいこととなっている。結果は図表4にまとめてあるが、男女ともに最も選択されているのは「8、明るく楽しい」で男性81.6%、女性85.1%であり、次には「6、自分を成長させてくれる」で男性61.3%に、女性73.5%、「2、夫婦の絆を深める」で男性64.6%、女性63.1%、「4、次の社会を担う世代をつくる」が

男性63.5%に女性49.3%となっており、子ども持つ意味を積極的に評価している事が分かる。

一方で、子どもの否定的な面を支持する率としては、「12、お金がかかる」で男性31.7%に女性39.5%、「13、自由が拘束される」が男性25.2%に女性36.5%となっている。特に「13、自由が拘束される」という選択肢は男女差が大きく、それだけ実際の育児の負担が女性にかかっているからとも類推される。

また選択者が非常に少ない項目としては「3、子どもをもって初めて夫婦は社

会から認められる」が男性10.6%に女性6.1%、「10、子どもがいると老後が安心」で男性8.2%に女性7.1%となっている。途上国では子どもによって老後の保障を得るために多産になるといわれているが、逆に日本の場合は“子どもを老後のあてにしない”というのが徹底しており、子どもが親にとって投資財ではなく、「明るく楽しいから産む・消費財」となっていることが分かる。

この他に男女差が目立つ項目としては「1家の跡継ぎである」というもので、どちらもそれほど高くはないが男性で2

3.3%、女性10.6%となっている。これからも「家のために子どもを産む人」はそれほど多くないことが分かるが、特に女性の場合は、そういった意識が希薄と思われる。

また、「14子どもは特に必要でない」を選んだ人は男女ともに2%弱であり、少なくとも今回の調査に回答した既婚者は男女ともに、子どもの持つ意味を積極的に表かし、子どもを産み育てるという事が希望に満ちたものであるという意識を持ち続けていると考えられる。

図表4 子どもとは何か (複数回答)

	男性計	女性計	共働きの夫	専業主婦を持つ夫	共働きの妻	専業主婦
1家の跡継ぎである	23.3%	10.6%	25.5%	20.0%	9.1%	12.5%
2夫婦の絆を深める	64.6%	63.1%	61.6%	67.8%	60.4%	67.2%
3初めて夫婦は社会から認められる	10.6%	6.1%	11.4%	9.4%	4.9%	7.0%
4次の社会を担う世代をつくる	63.5%	49.3%	61.2%	69.2%	53.0%	45.6%
5人間として自然のこ	43.4%	35.4%	44.4%	44.3%	38.3%	31.3%
6自分を成長させてくれる	61.3%	73.5%	58.0%	68.1%	73.6%	72.4%
7夢を託すことができ	23.4%	16.3%	23.9%	22.4%	14.7%	19.5%
8明るく楽しい	81.6%	85.1%	80.4%	84.9%	85.0%	86.2%
9生き甲斐	38.7%	38.0%	33.6%	45.1%	35.6%	41.9%
10老後が安心	8.2%	7.1%	10.2%	6.2%	7.9%	7.0%
11手間がかかって面倒	12.2%	12.8%	13.5%	8.9%	13.0%	12.5%
12お金がかかる	31.7%	39.5%	30.2%	33.2%	39.6%	39.1%
13自由が拘束される	25.2%	36.5%	24.4%	25.9%	36.6%	38.0%
14特に必要でない	1.6%	1.8%	1.7%	1.0%	1.9%	0.8%

Q5では「理想的な子どもの数」、Q6では「将来何人の子どもをもつつもりか」という予定の子ども数をきいている。

まず、図表5では、男女それぞれの「理想子ども数」と「予定子ども数」の平均をまとめてみた。これをみると、理想は

いずれも2.5を上回っているのに、予定では2.2前後であること、特に女性の場合は専業主婦・派遣パート・フルタイムの順で予定の子ども数が小さくなっていることが分かる。

図表5 子ども数

	理想子ども数	予定子ども数	サンプル数
男性計	2.540	2.170	1071
女性計	2.536	2.096	1074
共働きの夫	2.253	2.076	562
専業主婦を持つ夫	2.661	2.208	370
女性フルタイム	2.539	2.030	486
女性パート・派遣	2.480	2.107	151
専業主婦	2.531	2.093	384

それでは、男女別にどのような割合で「理想」「予定」子ども数を選んでいるのだろうか。さらに、実際の状況と比較するためにも、後半の属性調査で回答してもらった実際の子どもの数も並べてみた(図表6)。

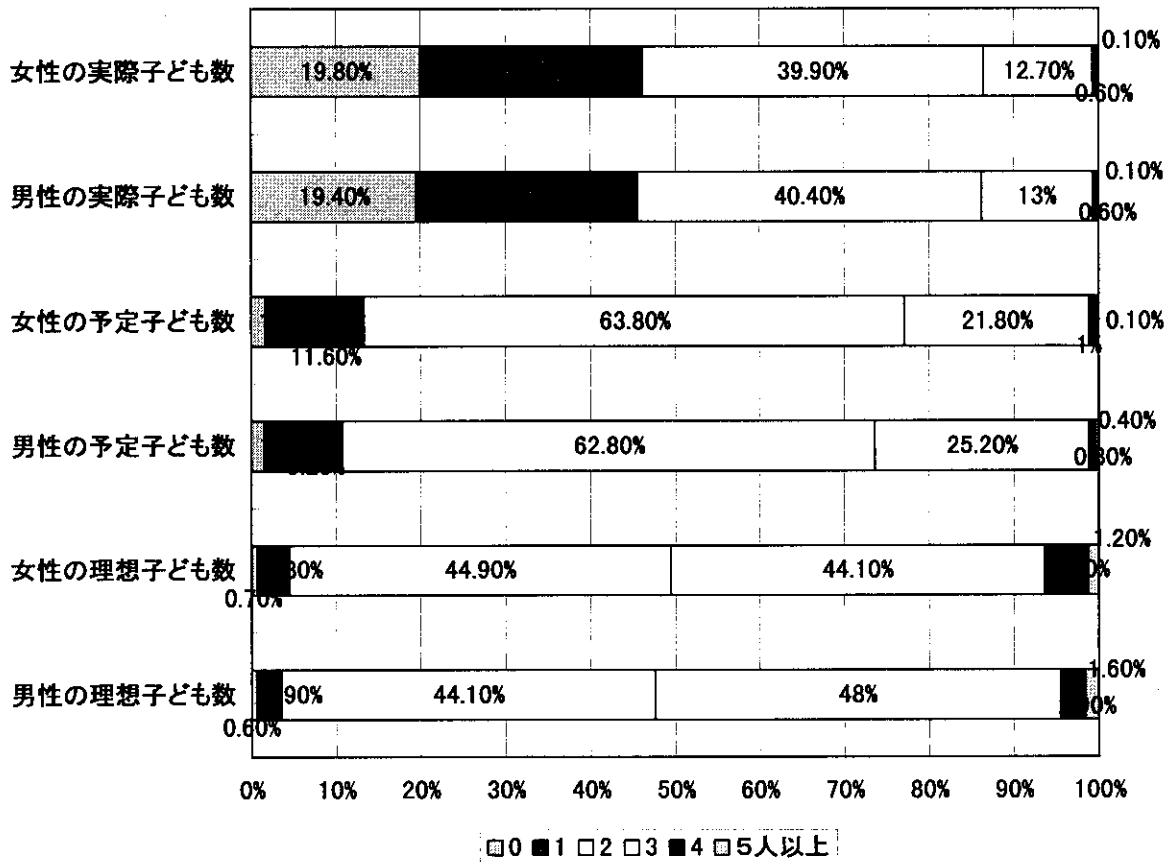
まず「理想」から見てみよう。理想子ども数が2人は男女順に、44.1%に44.9%、3人は48%に44.1%である。つまり、殆どどの人の理想子ども数は2人か3人かに2分されているわけである。一人っ子を理想としている人は男女順にわずかに2.9%に3.8%に過ぎない。一方4人以上を理想としてい

る人も男女順に3.5%に6.4%と少なくなっている。

それでは、予定子ども数はどうなっているだろうか。図表6に見られるように、予定子ども数では、2人がぐっと増えるとともに、それだけ3人が減ることになる。男女順に見ると2人を選んでいるのは、62.8%に63.8%と理想と比べると大きく増え、逆に3人は25.2%の21.8%と減少している。また理想では少なかった1人も男女順に9.2%に11.6%となっているのである。さらに4人以上の予定者となると、1.2%に1.1%と僅かとなってしまふ。また、

注意を引くのは女性の方が男性より3人 も数が少ないことだ。
 を少なく選んでおり、それだけ予定子ど

図表6 男女それぞれの理想・予想・実際子ども数



さらに、実際子ども数は予定子ども数を下回っている。これは夫婦のペア調査なので、実際子ども数においては男女のズレが僅かしかでないはずである。これをみると、0人は20%弱、一人が約25%、2人が約40%、3人は僅かに13%弱に過ぎないことがわかる。女性回答者の年齢は20代から50代までにわ

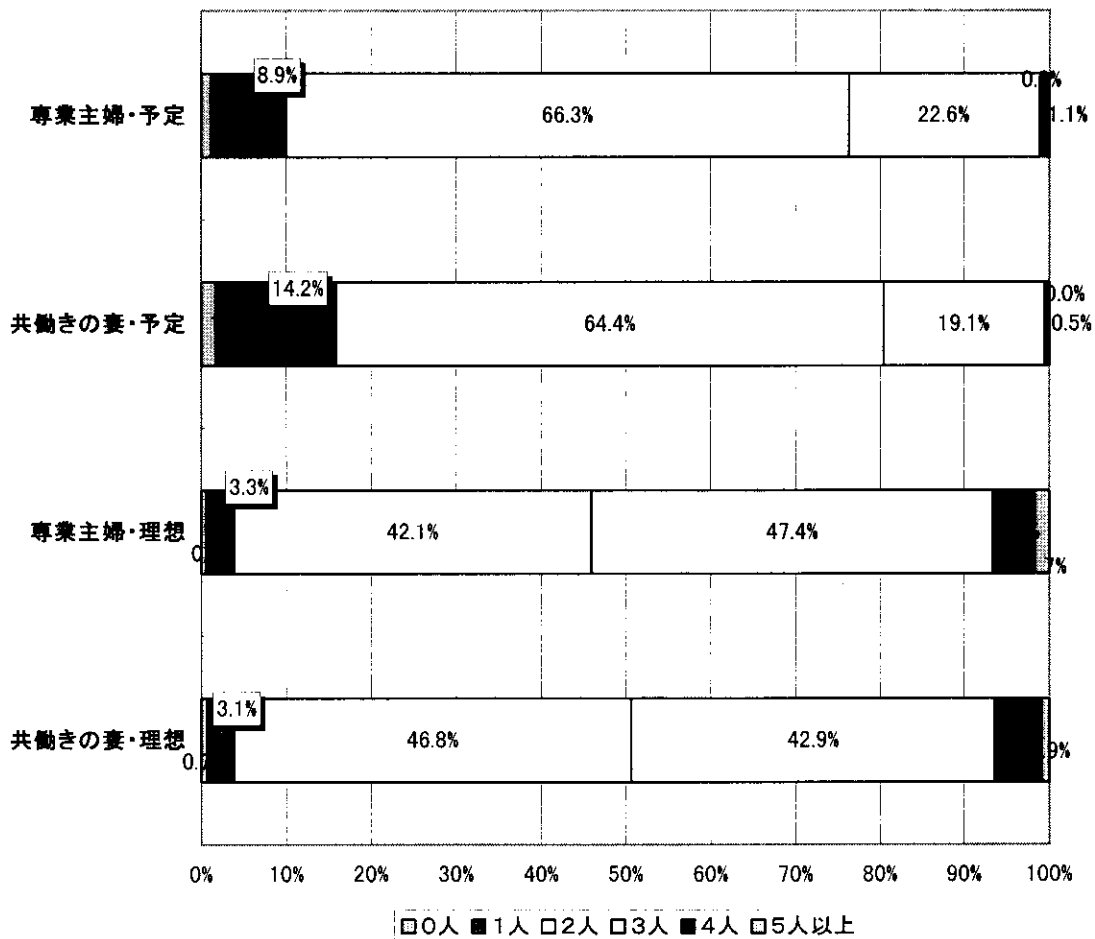
たっており、平均年齢は34.8歳であるため、まだまだこれから出産する人も多いと思われ、実際子ども数が少なめにでていることを忘れてはならない。だが、おそらく予定子ども数を実際には産まない人も少なくないと思われる。

また図表7に、専業主婦か共働きの妻

かの別に理想と予定の子ども数の違いを
 まとめてみた。これをみると、理想子ど
 も数では殆ど違いがないものの、予定子
 ども数では一人が共働きで14.2%、

専業主婦で8.9%であり、3人が同じ
 順に19.1%と22.6%と、共働き
 の方が予定子ども数が少ないのが分かる。

図表7 共働き・専業主婦別・理想・予定子ども数



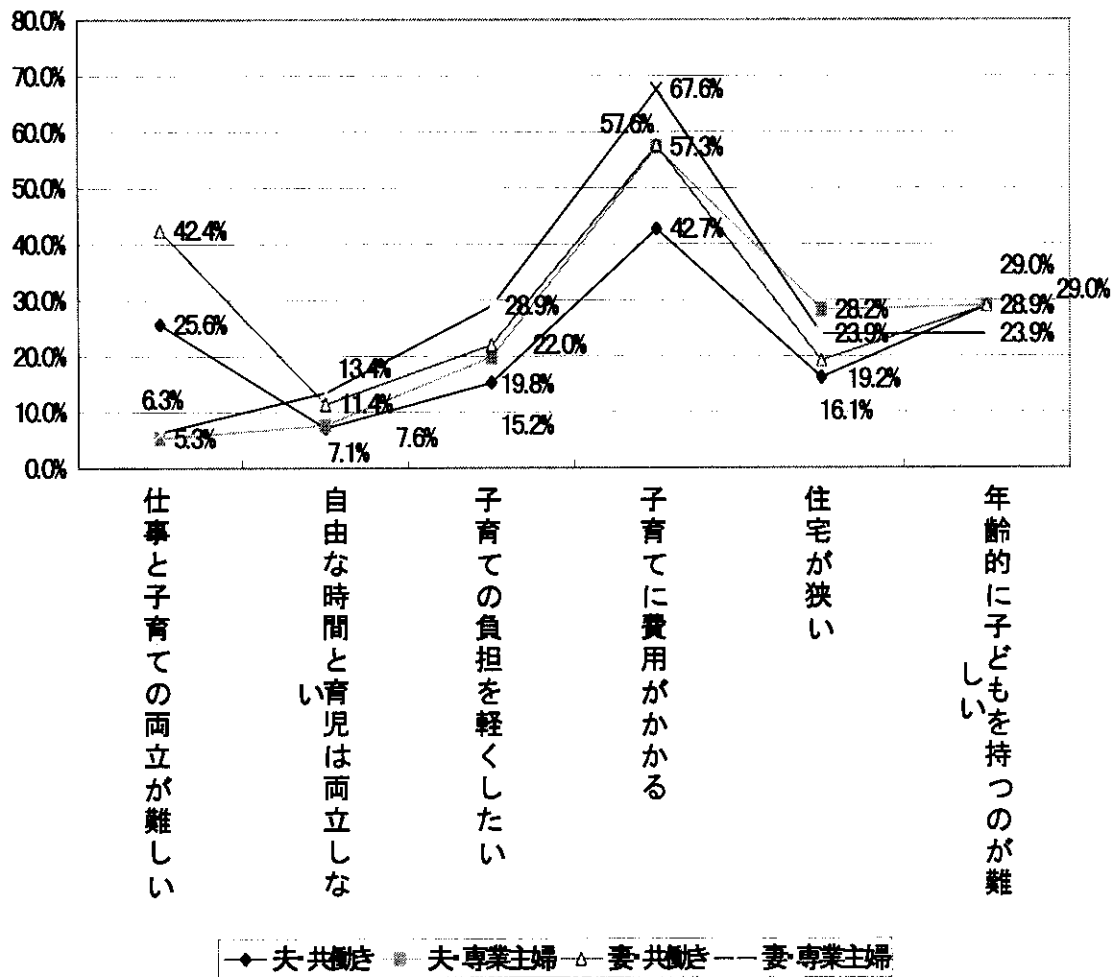
Q7では、なぜ理想の子ども数より予定
 の子ども数が小さいのかという理由を聞
 いている。これは図表8に上位7つを選
 んでまとめているが、男女ともに大きな

理由として「子育てに費用がかかる」こ
 とを挙げている。但し、この理由を選ん
 でいるのが専業主婦では67.6%と大
 きいものの、共働きの妻ではそれが57.

6%と10%の開きがあり、さらに共働きの夫ではこの理由を選んだ者が42.7%と大きく下がることが興味深い。これは子育てに費用がかかるのは当然だが、共働きでは比較的経済的な問題が深刻で

はないのか、もしくは経済的理由以外に子どもが少なくなる障害があるものとも推測される。

図表8 なぜ理想より予定子ども数が少ないのか



次に目を引くのが「仕事と子育ての両立が難しい」であり、これを共働きの妻は42.4%、共働きの夫の25.6%が選択しているが専業主婦家庭では男女ともにこの選択者は少ない。また、ここで考えなくてはならないのは、共働きの夫は、一般論として「仕事と子育ての両立が難しい」というのを選んだのか、妻の姿をみて難しいと感じているのか、共働きの夫として男性でも自ら「両立が難しい」と思っているのかどうかということである。後半では、実際の子育ての分担の状況も見るが、そこででは共働きの夫の場合は、専業主婦を持つ夫に比べて

育児を分担する度合いも大きいので、それだけ男性でも自分の子育て責任と仕事の両立を難しいと考えていると推測することもできるが、ここでははっきりした結論は出せない。

また、「子育ての心理的・肉体的負担を軽くしたい」は、専業主婦が28.9%と他の3者に比べて多くの者がこれを選択している。この選択肢は共働きの妻は22%と専業主婦よりこれを選択する者が少ないが、男性はさらに少なく、男性はそれだけ育児の負担が軽いということも考えられる。次には「住宅が狭い」という住宅問題が挙げられている。

図表9 子ども数・理想と予定

			理想子ども数	予定子ども数	実際子ども数
共働き カップル	夫	理想と予定が同	2.259	2.259	1.268
		理想より少ない	2.981	1.773	1.457
	妻	理想と予定が同	2.224	2.224	1.418
		理想より少ない	2.918	1.759	1.239
専業主婦 カップル	夫	理想と予定が同	2.397	2.397	1.693
		理想より少ない	2.961	1.863	1.427
	妻	理想と予定が同	2.272	2.272	1.637
		理想より少ない	3.049	1.930	1.549

ここで注意しなくてはならないのは、どのような人が理想子ども数を予定子ども数が下回っているかということだ。図表9に「理想と予定子ども数が同じ」か「予定が理想を下回っている」人別に子ども数をまとめてみた。そうすると、「予定が理想を下回っている」人は、「理想と

予定子ども数が同じ」人に比べ、理想そのものが大きいことがわかる。例えば、これと図表6とを一緒にして考えてみると、「予定が理想を下回っている」人の多くが、理想を3人として予定を2人している人であり、「理想と予定子ども数が同じ」人の多くが、理想を2人として

予定を2人に行っている人であると考えられる。だが一方で、「予定が理想を下回っている」人の場合には、理想の高さにも

関わらず、予定も実際子ども数も小さくなっているため、今後詳しく分析することが必要だろう。

Q8では、実際に誰が子ども数を決める主導権を握っているかを知るために「夫婦の間で、子どもを産むかどうか、また何人産むかどうかといった問題についてどちらの意志が優先されますか」ということを聞いている。結果は図表10にまとめてあるが、多くが「どちらともいえない」ものであり、「夫の意志が優

先」されているのは10%に満たないことや、「妻の意志が優先されている」のが20%前後であることが分かる。また、少しの差ではあるが夫が「妻の意志が優先」と思っているほどには妻は「妻の意志が優先」されているとは思っていないことが分かるおもしろい結果となっている。

図表10 子どもを何人産むかどうかは誰が決めるか

	男性	女性
主に夫の意志が優先	9.20%	8.90%
主に妻の意志が優先	23.20%	19.80%
どちらともいえない	64.40%	67.60%

Q9では、女性のライフコースとして、1、職業にはつかない 2、専業主婦コース 3、再就職コースなど6つのパターンを挙げ、A、あなたの理想のライフパターンはどうですか（男性の場合は自分の配偶者のケースで答える）、B、現実にはどうなると思うか（男性の場合は自分の配偶者のケースで答える）と聞いている。理想のライフコースに関しては図表11-1、現実になりそうなライフコースに

関しては図表11-2にまとめた。まず、図表11-1の妻の理想のライフコースから見てみよう。まず男女別に見ると、一番支持されているのが「3、結婚・出産で退職し、子どもの成長後パートで再就職する」というコースで、男性37.6%、女性36.4%の支持を得ている。次に多いのは「5、結婚・出産に関わらず継続就業する」というもので、男性20.9%に女性26.5%、その次は「4、結婚・出産で退職し、子

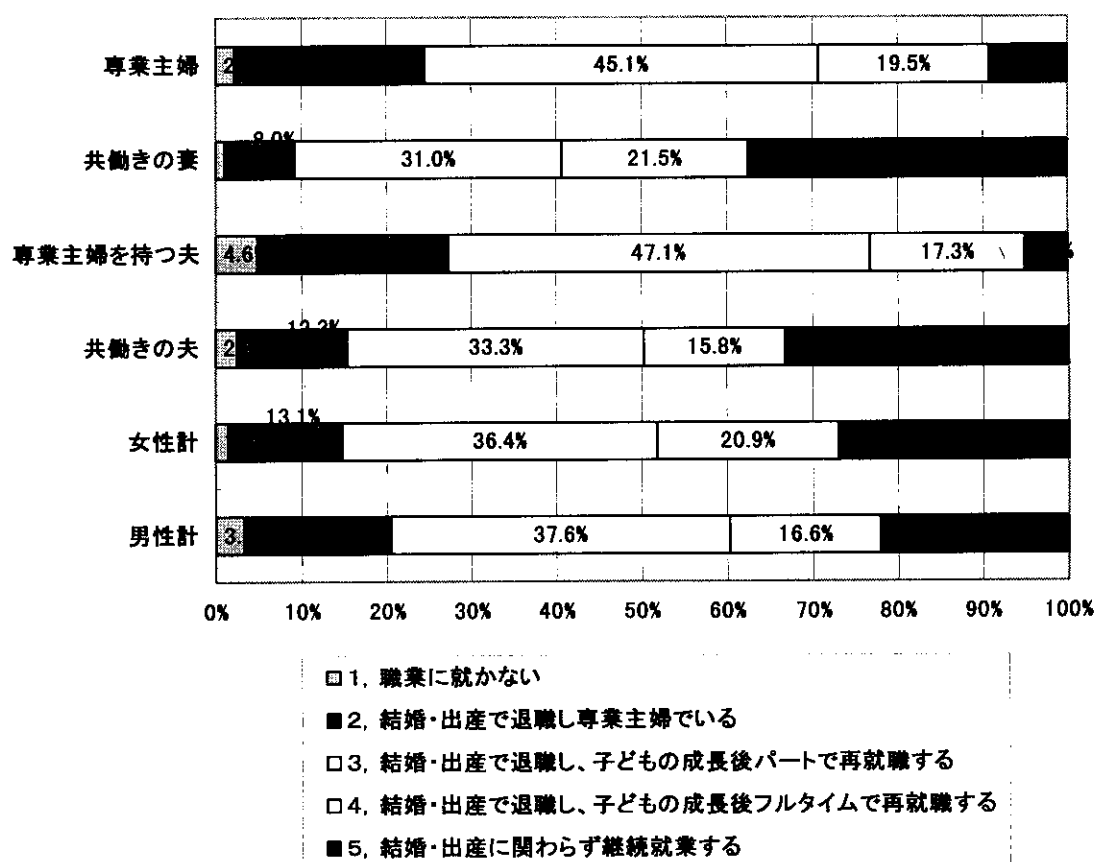
どもの成長後フルタイムで再就職する」というもので、男性16.6%に女性20.9%となっている。特にパート・フルタイム（選択肢3と4）を足しあわせて再就職コースとすると、男性54.2%、女性57.3%がこのライフコースを理想と考えていることが分かる。

一方、「1、職業に就かない」は男女順に3.1%に1.4%、「2、結婚・出産で退職し専業主婦でいる」は同じく16.2%、13.1%であり、専業主婦コースは男女ともに2割も支持がない。この背景の理由は類推するしかないが、何らかの妻の収入がないと家計の維持が難し

いことが認識されているのか、女性自身も平均寿命が長くなっている中で専業主婦だけでは一生が過ごせないと考えているのかもしれない。

だが、共働きかそうでないか別に理想のライフコースを見ると、ずいぶんと結果が違ってくる。共働きでは男女関わらず「5、結婚・出産に関わらず継続就業する」コースへの支持が男性が31.6%に女性が37%へと増加する。また、この部分が増えているのに反比例して、専業主婦コースを選択する人が少なくなっている。

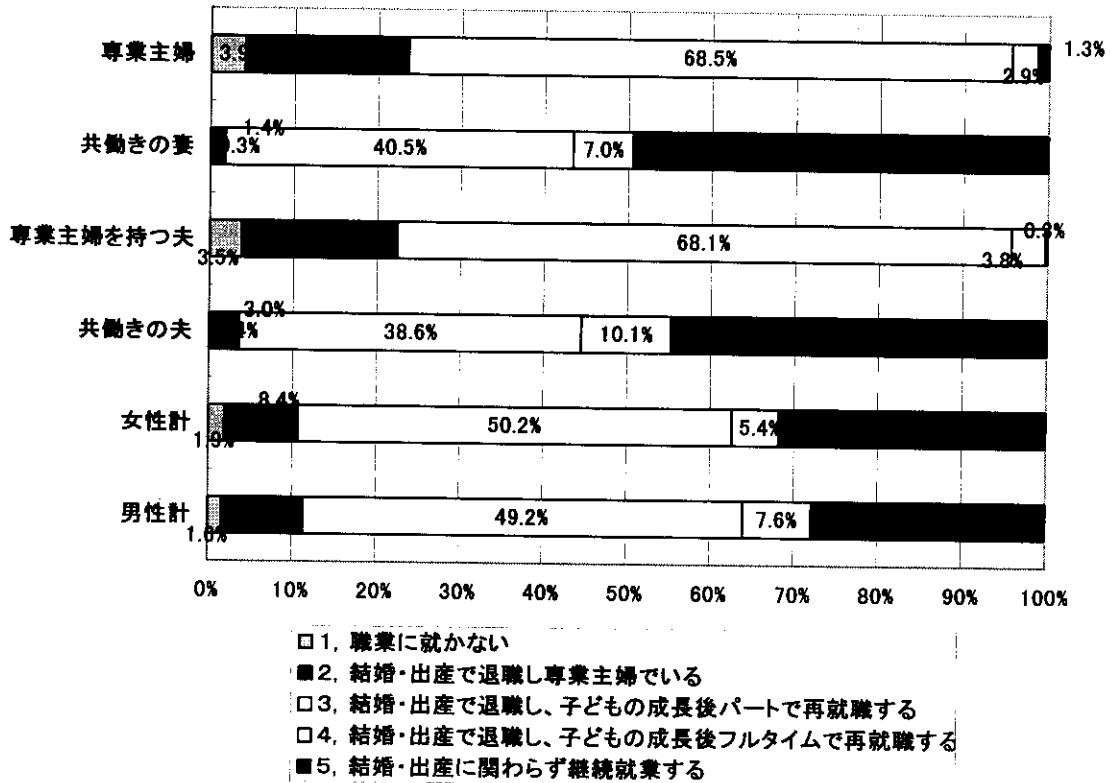
図表11-1 妻の理想のライフコース



また、専業主婦世帯の場合は、「5、結婚・出産に関わらず継続就業する」コースは男性4.9%、女性は9.1%しか選択しておらず、共働きの男女と大きな差を示している。さらに「2、結婚・出産で退職し専業主婦でいる」を選択する者が多くなっており、男性21.3%、女性21.9%である。但し、専業主婦世帯でも女性が働くことを否定している

人は多くなく、「3、結婚・出産で退職し、子どもの成長後パートで再就職する」コースを選択する者が男性で47.1%、女性45.1%であり、これとフルタイムで再就職するコースを選択している人と合わせると、男女ともに6割以上の人が再就職コースを好んでいることが分かる。

図表11-2 妻の現実のライフコース



それでは現実にはどのコースになりそうと考えているのだろうか。現実には継続就業の選択者が男性で26.1%、女性で30.8%と増えている。さらに増えているのはパートで再就職のコースで男性49.2%に50.2%であり、フルタイムで再就職のコースは男性で7.6%に女性で5.4%と理想に比べて大幅に減っている。これはフルタイムで再就職というのが非常に難しい状況を反映していると思われる。また専業主婦です

っというコースも減っており、パートで再就職というのが、もっとも現実になりそうなコースとして認識されることが分かる。やはり、経済的にはずっと専業主婦でいられず、いずれ働かざるを得なくなるという認識が広がっているのだろうか。

これを共働きかそうでないかで見ると、共働きの場合は、選択に2つの山が現れる。パートで再就職と継続就業である。それぞれ男女順にパートで再就職は38.

6%に40.5%、継続就業が42.2%に48.1%である。また専業主婦カップルの場合は山が一つになる。パートで再就職というのが最も支持され、男性の68.1%、女性の68.5%に選択さ

これはフルタイムで再就職というのが非常に難しい状況を反映していると思われる。また専業主婦でずっといるというコースも減っており、パートで再就職というのが、もっとも現実になりそうなコースとして認識されていることが分かる。やはり、経済的にはずっと専業主婦でいられず、いずれ働かざるを得なくなるという認識が広がっているのだろうか。

これを共働きかそうでないかで見ると、共働きの場合は、選択に2つの山が現れる。パートで再就職と継続就業である。それぞれ男女順にパートで再就職は38.6%に40.5%、継続就業が42.2%に48.1%である。また専業主婦カップルの場合は山が一つになる。パートで再就職というのが最も支持され、男性の68.1%、女性の68.5%に選択されている。つまり、専業主婦カップルの場合は男女ともに約7割がパートで再就職、約2割が専業主婦のまま、約5%がフルタイムで再就職か継続就業で、残りは不明という選択になっている。

れている。つまり、専業主婦カップルの場合は男女ともに約7割がパートで再就職、約2割が専業主婦のまま、約5%がフルタイムで再就職か継続就業で、残りは不明という選択になっている。

Ⅲ－3. 育児休業や職場環境について

Q10からQ17では、子どもがいて働いている人に主に育児休業について聞いている。そのため、ここでは専業主婦は回答していない。育児休業の取得状況をまとめたものは図表12となっている。また、男性のなかで育児休業取得者が2名いた。これをみると、夫婦のカップリング調査であるため、男女間で大きなズレがあるのはおかしい。特に「双方が利用しなかった」という項目が気になる。男性では、専業主婦の夫が半分近くサンプルに入っているため、育児休業制度がある企業に夫が勤めていたが、妻は専業主婦であるため、育児休業を利用する必要がなかった人がこの「双方が利用しなかった」という項目を選択していると考えられる。実際は、妻が専業主婦である場合、夫は育児休業を利用する権利はない。そのため、実際の育児休業の利用状況を見るには、女性の回答を見る必要がある。

図表12 育児休業の取得状況

	男性	女性
自分が利用した	0.2%	34.6%
配偶者が利用した	17.9%	0.4%
制度はあつたが双方が利用しなかった	42.7%	15.6%
制度が導入されていなかった	27.2%	26.3%
不明	12.1%	23.0%
サンプル数	826	456

そして、女性の育児休業取得状況をみると、育児休業を利用した人が34.6%に、利用しなかった人が15.6%、制度が導入されていなかったが26.3%となっている。不明の人が23%いるものの、これを見ると制度が利用できる状態では3人に2人が利用し、3人に1人が利用していないという概要が導かれる。

Q11では、さらにQ10で育児休業を取得した女性158人に、「なぜ、あなたが育児休業を取得したか」と聞いている。これをみると、「育児は自分の方が適している」を選んだ人が72.8%、「自分の取得の方が経済的負担が小さい」が33.5%と2つの大きな理由になっている。出産した女性は産休を取っていてもいるため、そのまま育児休業に入りやすいし、また男女の所得差を考えると、女性が休業する方が経済的にも有利であることは理屈にあっている。またこの他に、男性でも2人育児休業を取得した人がいるが、その人は一人ずつ、「育児は自分の方が適している」と「その他」を選んでいる。